

## 住民主動型組織における情報交流に関する考察～NPO 法人コロボックルプロジェクトを例に～

滋賀県立大学大学院 学生会員 原口朋子  
 名古屋市立大学大学院 正会員 藤森憲臣  
 崇城大学工学部 正会員 森山聡之

### 1. はじめに

NPO 法人コロボックル・プロジェクト(以下 C・P)は、熊本市に位置する金峰山山系の生物多様性生態系の保全を活動の主目的に運営される住民主動型 NPO 法人であり、法人設立 1 年を迎えている。

本研究では、C・P における法人運営に際して情報交流手段のメインツールとして用いているメーリングリスト(Mailing List: 以下 ML)有効度の検討を行うことを目的にした。

ここでの検討方法として、カテゴリー別(利用者別、目的別など)・項目ごとに区分し、整理(グラフ化)することでその有効性を評価しようとするものである。

今までの集会や委員会といった関係者同士が集まるアナログ的な方法の他、今後も身近な情報交流手段としてメールや HP といったデジタル的な方法も大いに併用していく必要がある。

ML はその一つ的手段としてとして広く普及し始め、そのツールの持つ役割は大きい。しかし、本法人内では ML の活用がうまく機能していない実状である。そこで、今回は活動の盛んな他の団体や本法人の ML の活用状況を比較し、よりよい ML の活用方法を検討・提案する。

### 2. メーリングリストとは

ML とは、電子メールを使ったインターネット活用法のひとつで複数の人に同じメールを配送できる仕組みである。

また送られてきたメールに返信をすれば、そのメールも登録されている人全員に送られ、1対1の文通形式と異なり複数同士でのメールのやり取りが可能となる。

これが ML の最大の特徴であり、これを利用すると、特定のテーマを決めてそれに興味を持った人が集まり、情報や意見の交換をする場が形成出来る。

その他にも連絡や打ち合わせなど、特に不特定多数の人とのコミュニケーションに ML は大きな威力を発揮する。

### 3. 方法

本研究では、ML の活用が不十分な「NPO 法人 C・P」

と ML の活用が十分にされている愛知県の住民主動型組織の任意団体「H」のメーリングリストを選定した。C・P の活動は熊本市西部地域の約 80k m<sup>2</sup>を主なフィールドとしている。(図1)

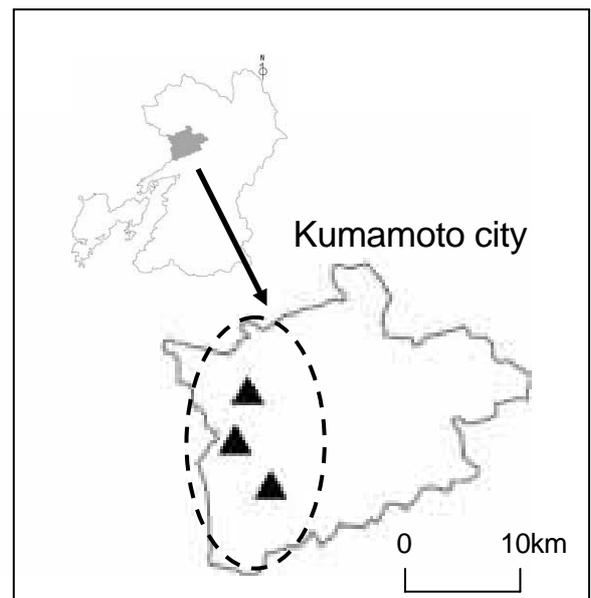


図1 研究対象地域(C・Pの活動フィールド)

その中から 1.利用目的、2.利用者の年齢、3.内容、4.送付者(住民、企業、研究者、行政)、の 4 つの項目について統計解析を実施した。

また、ML の解析期間は C・P2004 年 5 月 17 日～2005 年 4 月 12 日、任意団体「H」にて 2004 年 8 月 7 日～2005 年 4 月 12 日までの両団体約 1 年分である。

### 4. 結果および考察

1) 利用目的に関してはメールの内容から「報告」「連絡」「相談」で 3 区分し、解析を実施した。

図 2 から分かるように C・P の場合も H の場合も連絡:6 割、報告:2 割弱の結果が得られ、会員同士による会の運営連絡に利用されていることが多い。しかし、「H」の任意団体については毎回、委員会が終わった直後に議事録を ML にて報告される点に差異が見られた。

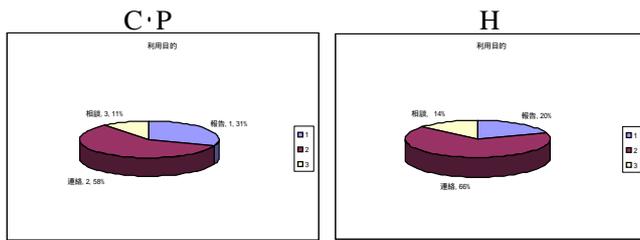


図2 目的別分類による利用率

2) 利用者の年齢に関しては10代、20代、30代、40代、50代以上で5区分し、解析を実施した。

C・Pの場合は20代が最も多く比較的若い利用者が多く見られた。また、Hの場合は40代、50代の利用が多く見られた。ただし、この場合は団体の所属による差とも見られる。

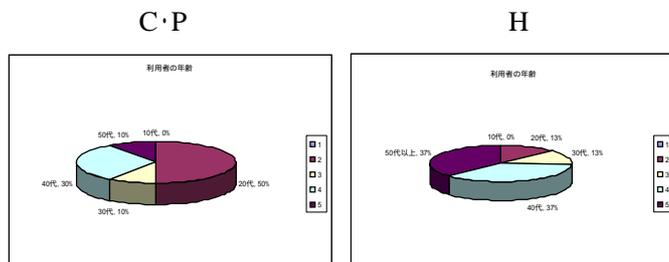


図3 利用者年齢別分類による利用率

3) 内容に関しては自然、情報で2区分し、自然環境の内容であるか、または運営連絡などの情報交換の場であるかを解析した。

結果として、両団体とも個人個人の活動による発見・発掘した情報を報告するというより、会の運営連絡のための情報交換の場としての利用が多い。

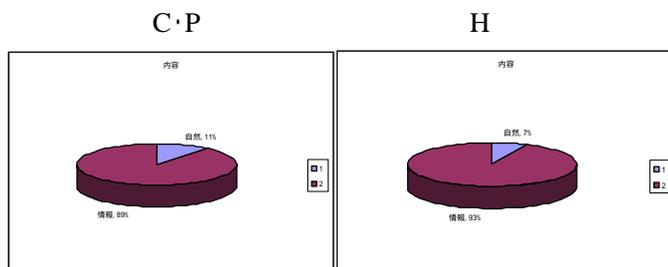


図4 情報内容別分類による利用率

4) 送付者に関しては住民、企業、研究者、行政(C・Pの目指すパートナーシップ)に4区分し、各分野で最も積極的に活用しているかの解析を実施した。

「C・P」の団体の場合は研究者が約8割、市民2割に対

し、「H」団体の場合は研究者が4割、市民6割という結果であった。これらの結果から、「H」の任意団体の方がより住民主動で活動を行っていることを示す。

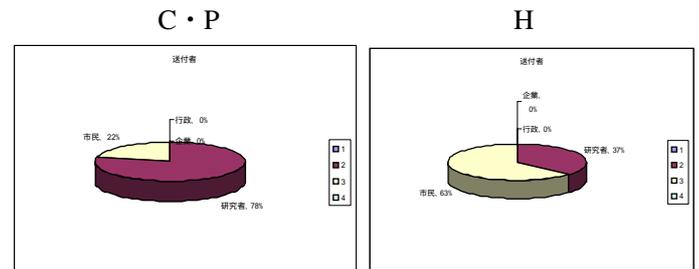


図3 利用者年齢別分類による利用率

## 5. まとめ

これらの結果および考察から、C・Pの場合はアクセスする人が限られていることや一方的な情報発信の場となり、なかなかメールでの反応が返ってこないことなどがあげられる。

本来MLとは、場に集まらなくても議論ができること、や個々の時間の制限なしで情報交換が出来る場として活用していけると考えられる。しかし、実際にはインターネットや携帯電話などといった端末を使える人間に限られることなどがあり、有効に活用ができていないことが今回の結果からわかった。

## 6. 提案: 今後のML活用方法

これからのC・PにおけるMLの活用法の提案としては

- 1) 一方的な情報発信の場ではなくメーリングリスト上で意見の交換、情報の交流が盛んにする。
- 2) メーリングリストの使い方を基礎から会員にレクチャーする。
- 3) 会議の内容などの議事録はメーリングリストに流し、すべての会員が常時見られる環境を整える。
- 4) 会員内だけでなく、近くの小、中学校にも情報の交流を促し、地域のコミュニティの形成を図る。

## 参考文献

- ・原口朋子, 藤森憲臣: 金峰山におけるグラウンドワークの検証 - 自然環境との共生と快適環境の構築 - 平成15年度土木学会全国大会研究要旨集, 2003.9
- ・原口朋子, 藤森憲臣, 森山聡之, 甲斐原巖: 「グラウンドワーク」を活用した地域づくり - 地産地消を目指したパートナーシップの提案 - , 平成15年度土木学会中部支部研究発表会要旨集, 2004.3